

# 北海道網走の板碑

——板碑の北限探查紀行——

播 磨 定 男

## はじめに

板碑は呼称からすると石碑や墓碑の仲間と誤解されるが、本質は板石状の石造塔婆であり、仏教信仰の表出物である。平安時代後期に出現し江戸時代初期には日本史上から消滅した、わが国中世社会の歴史的産物であって、その地理的分布は北は北海道の網走市から南は沖縄県中頭郡中城村に至るまで、総計六万基にも及ぶ遺品が発掘されている。<sup>(1)</sup>北海道の板碑は南北朝期の貞治六年（一三六七）以降のものが、函館市及び亀田郡戸井町と網走市の三箇所<sup>(2)</sup>に計四基遺存し、中でも網走の一基は道北東部に孤立しているだけに、存在自体が強いインパクトを与える。網走にある板碑は果たしてどんなものか。確かに地元網走で造られたものだろうか。これらの疑問を抱きながら、昨年九月に漸く現地を訪ねることにした。

## (一) 室町時代の造立

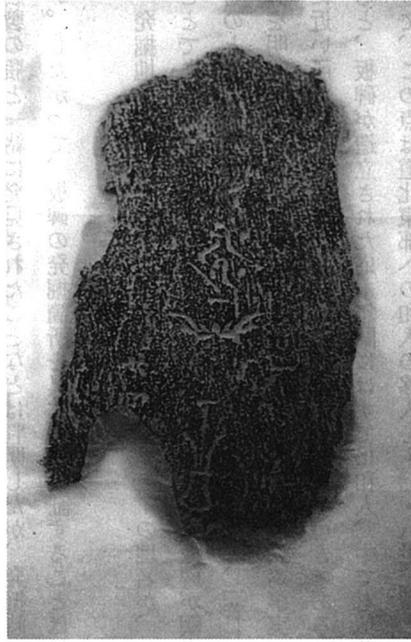
網走市街の南側丘陵地に桂ヶ岡公園があり、園内高台には史跡指定のアイヌのチャシコツ（砦跡）とその北隣に赤い円屋根をした網走市立郷土博物館が建っている。板碑は同博物館の二階展示室に、オロッコ人やギリヤーク人などの北方民族資料と共に公開されているが、実はこれはレプリカであって、本物は同館の金庫に保存されている。博物館の御厚意により調査は勿論本物を対象に計測、手拓等を試みることにした。

板碑の本体は縦二八・三<sup>センチ</sup>、横一六・五<sup>センチ</sup>、厚さ一・九<sup>センチ</sup>と意外に小形であり、簡単に持ち運びも可能な大きさである。下方を欠失し、周縁部も損傷していることから推察すると、原形はもう一回りぐらい大きかったものと推定されるが、頭部の山形やその下に來るべき横二条線の形跡は、正面・側面とも認められない。身部の郭線も無いようである。従ってこの板碑は頭部山形と横二条の切り込みを有する所謂青石塔婆形式の板碑とは異なる自然石板碑であり、石質は下部左側の大きく欠失した箇所等から見て、関東地方の同遺品に多用される緑色片岩と考えられる。

次に、この板碑の内容表現であるが、正面主要位置に主尊として異体形のキリーク（阿弥陀種子）を蓮座上に顕刻し、その下に三茎蓮の花瓶一個と両側に「广永」「井四」と刻銘している。そのまま解釈すれば、この板碑は室町時代の応永廿四年（一四一七）に造立されたことになるが、「广永」を元号とすると両字間が離れ過ぎていること、また、「井四」の方は年字を欠くなどの疑念もあり、応永年間の何月廿四日と解することも強ち間違いとは言えない。

一方、紀年銘以外の主尊や蓮座、花瓶などの形状や彫法を見ると、抑揚のある写実的な影は薄れ、扁平で硬直化したものとなっている。これはいうまでもなく板碑文化隆盛後の現象であり、したがって、紀年銘を板碑文化衰退期の応永年間と判断することへの有力な補強材料と言えよう。

しかし、この板碑が果たして地元網走で造立されたかという疑問に対しては、右の事実が必ずしも有利には展開しない。つまり、網走にある板碑は室町時代の製作ではあるが、どこか他所で造られ、後代に網走へ搬入された可能性が高いのである。



網走市車止内出土の板碑  
(網走市立郷土博物館所蔵)

(二) 発掘地クルマトマナイ

今より丁度八十年前の大正五年に網走を訪れた清野謙次博士は、地元の郷土史家米村喜男衛氏の案内で板碑を親しく実見され、その所見を『民族』(三ノ三)に発表された。<sup>4)</sup>これによると、現存の板碑は明治四十三年頃に地元住人の玉木久次郎氏が網走町字マルマトマナイの地中から、下部欠損した金属製の瓶(現在行方不明)と共に発掘した由

である。清野博士が板碑の発掘地として報じたマルマトマナイは、江戸時代後期にこの地を訪れた松浦武四郎の『夷日誌』（安政五年、一八五八年）に「クロマトマナイ左リ小川、右共雜木立」とあり、昭和三十三年発行の地元『網走市史』上巻では「クルマトマナイ車止内」に訂正された。

車止内は東に潮見、南は八坂、西は天都山に囲まれた広い地域で、現在は水路改修のため昔日の面影も薄らいでいるが、当時は中心部を流れるクルマトマナイ川が天都山の湧水を合流し網走川に注いでいた。また、発掘者の玉木氏は車止内に旧在した北楽園という庭園の庭師で、園内の大木を倒した際にその根元付近の地下から、板碑が下部欠失した金属製の瓶と一緒に発見されたことなどは判明したが、発掘時の記録は無論存せず、当時を知る人の生存も得られない。したがって、板碑の発掘箇所を具体的に検証することは最早不可能であり、玉木氏子孫の消息も定かでない。

ただし、発掘地に関連して注意すべきはクルマトマナイの地名が、アイヌ語で「和人の女が住んでいるところ」を意味することである<sup>6</sup>。このことはいうまでもなく発掘された板碑が網走かその周辺で和人によって造立されたことを示唆するものとして興味深い。清野博士もこの点に注目されて、「若し好事家があつて、之が内地からマルマトマナイに一板碑を明治四十三年より以前に故意に埋めて置いたと云ふ事実の根拠が無い以上、此板碑は応永年間に網走か或は網走に近い所で日本人の手により造られたものと信ず可きである」と結論づけられた<sup>7</sup>。

そうなると、板碑が造立された応永年間にはすでに和人、中でも仏教文化の保持者が網走地方に移住していたことになるわけで、この点は道北東部への和人の移入を十七・八世紀頃とする北海道通史の理解と大きな隔たりをもつこととなる。すなわち、北海道が蝦夷ヶ島、蝦夷ヶ千島と称されていた鎌倉時代にすでに和人の移入が認められるにしても、それは道南部の僅かな一角であつて、江戸時代に松前藩が成立した当初においても本拠の福山を中心に東西各二十五里、東は汐首岬付近まで西は熊石に至る海岸線を松前地と称し、亀田と熊石に番所を置いて和人は松前地への

み居住を許可した。<sup>⑧</sup>

汐首岬以東は東蝦夷地、熊石以西を西蝦夷地と呼んだが、中でも東の襟裳岬と西の神威岬を境にこれより奥地は奥蝦夷地であつて、北見・網走地方への和人の移入は寛文九年（一六六九）のシャムクシャインの蜂起鎮圧後、松前藩の支配が厚岸方面まで拡大した十七世紀後半とするのが穩当であろう。シャムクシャインの戦後近江商人の蝦夷地への進出は一層活発化するから、交易を目的に來網しそのまま定住した者も居たと考えられる。いづれにしても地元『網走市史』が「しかしなお板碑の発見だけをもって応永移住を断定するには多くの困難があるう」<sup>⑨</sup>と慎重な態度を示しているのは、右のような事情が存するからである。

### (三) 網走板碑の原産地

網走にある板碑が他所から搬入されたとすると、いつ、だれが、どこから運んできたかに関心が移る。『網走市史』には発掘者の玉木氏が昭和二十五年に板碑を網走市立郷土博物館に寄贈された旨記されているから、先ず玉木氏宅を訪ねたいのだが、残念ながら同氏の係累は網走市内に存しないことが判明した。

残るのはこの板碑の原産地である。網走板碑は前述の如く板碑文化衰退期の遺品で、石質は緑色片岩と推定される。したがつて、この板碑と同一の石材を使用し、しかも類似の形状や内容をもつ遺品の多在する地域が注目されるのは当然であろう。久保常晴博士は網走板碑の花瓶や紀年銘の配置、石質などから、この板碑の原産地を関東地方の多摩川流域に比定され、<sup>⑩</sup>また、函館大学の白山友正教授は石質を輝石安山岩と見做し、東北津軽地方の十三湊付近に居住した安東氏縁故者の造立を示唆された。<sup>⑪</sup>両説とも一旦は他所で造立された板碑が後代になって網走に移動したと観る点で一致している。

ただし、問題はその原産地であり、これは石質の認定と深くかかわっている。私見では塔身の薄さや全体の色調、それに下部欠損した形状からして前述の如く緑色片岩製と判断し、したがって、久保博士の関東地方からの搬入説に同調するが、次に述べるような理由で、この際是非網走市立郷土博物館による石質の化学的分析をお勧めしたい。筆者の手掛けた事例で言えば類似の問題は中国地方の岡山県にも存するからである。

岡山市報恩寺の貞和四年（一三四八）名号板碑及び吉備郡真備町下二万字矢形出土の応永二十年（一四一三）弥陀種子板碑の二基<sup>12</sup>は、この地方には産しない緑色片岩製であるところから、これらは当然他地方からの搬入物であり、地元産の花崗岩製板碑とは系統を異にするものと考えられてきた<sup>13</sup>。そして、岡山県に距離的に近い緑色片岩の産地と言えは四国の吉野川流域であり、事実この周辺に緑色片岩製板碑が多在するところから、徳島地方より瀬戸内海を渡って運ばれたものと推測されたのである。

ところが、岡山県内には同じ緑色片岩製の板碑が他にも三基存することがその後の調査で確認された。吉備郡真備町の公民館に現存する永仁五年（一二九七）銘一基、延文五年（一三六〇）銘二基の計三基の板碑は共に石質が緑色片岩であるが、徳島地方の板碑とは内容表現に異なる点が認められるので、念のために石質の化学的分析を試みることにしたのである。試料は埼玉・徳島両地方の産石地から採取した緑色片岩の石片と埼玉県飯能市旧在の青石板碑、及び前記真備町公民館所在の一基から削り取った石粉で、これらを各々粉末にしてX線回折により組成鉱物や量比を同定する方法が採られた。勿論実験は専門家に依頼したが、石質の分析結果は意外にも、岡山県所在の緑色片岩製板碑は関東地方の秩父産石で造られていることが判明したのである<sup>14</sup>。岡山・徳島と割に近い位置にあり、両板碑文化の近縁性から原石の移動を想定するのは謂わば当然であるが、歴史の真相は寧ろわれわれの常識を超えたところに存したのである。

## (四) 石質吟味の緊要性

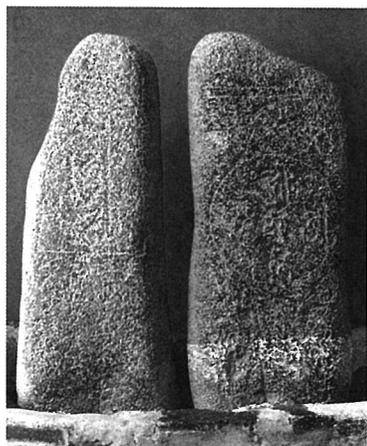
網走での調査を終え、翌日は斜里から知床半島を訪ねることにした。宇登呂より羅臼へ通じる知床峠でオホーツク海上に浮かぶ国後島を遠望、待機しているバスに戻り際足下の低い石垣に目をやると、そこには昨日調査した板碑と同じ緑色片岩が嵌め込まれているではないか。顕彰碑や記念碑とは違って、これは道路端の石垣である。使用する石材を吟味してわざわざ遠方から取り寄せる筈はあるまい。北海道でも緑色片岩が産出されるのであれば、網走板碑も地元産石で造立された可能性が出てくる。確率はすくないにしても一応は考慮してかかるべきであろう。

右の事実を確認すべく、早速知床博物館を訪ねることにした。岩石専門の合地学芸員によると、北海道でも旭川市の西側から日高地方を南北に貫く神威古潭変成帯のうち、神威古潭・日高三石や道南の戸井町などでは緑色片岩を産出することが知れた<sup>16)</sup>。

勿論、北海道に緑色片岩が産出されるからと言って、このことが直ちに網走板碑の地元造立を立証することにはならない。それはあくまでも可能性の一つであって、肝要なことは地元産出の緑色片岩の存在によって、網走板碑の石質を吟味する必要性が従来よりも増大したと理解すべきである。また、本稿で紹介した清野博士の地元造立説をはじめ、久保・白山両氏の外部移入説にしても各々説得力をもっているが、網走板碑の形式や内容を他地域のものと対比することによって得られた知識は蓋然的であることも事実で、これを少しでも必然に近づけるためには、対象自体から解答を導き出すような科学的方法を駆使せねばならない。石質の化学的分析はこうした期待に応え得る唯一の学問方法であって、その結果は膠着状態にある網走板碑の原産地問題に、必ずや有効に作用するであろうこと間違いないのである。

## むずびに

冒頭にも述べたように、網走市にある板碑は全国の総計六万基にも及ぶ同遺品の中で、地理的には最も北に位置している。系統問題に言及する場合、当然北海道にある他の板碑との関連性も考慮すべきであるが、函館市船見町称名寺の板碑は貞治六年（一三六七）銘と網走のものより五十年ばかり古いものの、こちらは地元産の安山岩製であり、形式や内容面からも網走の板碑とは直接的な関連性は無いようである。また、亀田郡戸井町の郷土館に保存されている二基の板碑も紀年銘は磨滅しているが、右の称名寺板碑に続く遺品であり、したがって、北海道にある板碑は道南部の函館市・戸井町と道北東部の網走市の二系統に分けられる。そして問題は北辺に一基だけ孤立する網走板碑の存在であり、それはこの地方への和人の移入、仏教文化の伝播・普及と直接関係するが故に、人々の関心を喚び問題の究明が俟たれるのである。



亀田郡戸井町宮川出土の板碑二基  
(戸井町郷土館所蔵)

これまで地元で造立されたと考えられてきた遺物が実は他所からの搬入物となると、勿論これに依拠した歴史の認識は改変せざるを得ない。しかし、移動の事実に伴ってこれまででは全く気付かなかった歴史の新たな発見が生まれることも大いにあり得るわけで、網走の板碑はこうした期待に十分応えるだけの史料的价值をもった遺品と言えよう。

(平成八年三月三十一日稿)

## 註

- (1) 播磨定男著『中世の板碑文化』(東京美術、平成元年)五九頁。尚、本書では板碑の南限を鹿児島県三島村としたが、多田隈豊秋著『九州の石塔』下巻(西日本文化協会、昭和五十三年)によると、沖縄県中頭郡中城村にも室町時代頃の板碑の存することが記されている。(同書四三二頁)ただし筆者は未見である。
- (2) 高橋 潤「北海道」(坂詰秀一編『板碑の総合研究』Ⅱ 地域編所収、柏書房、一九八三年)、千々和 到「北海道の板碑をめぐる」(羽下徳彦編『北日本中世史の研究』所収、吉川弘文館、一九九〇年)。尚、亀田郡戸井町の板碑二基については平成八年三月に筆者実見。
- (3) この板碑を最初に調査された清野謙次博士は、紀年銘について一応「応永廿四年」の造立と認めながらも、「然し、字の間取工合から見ると応永廿四年であるや否や疑はしい。応永何年何月の廿四日も知れない」と疑念を表明されたが、久保常晴博士は関東地方の北品川法禅寺にある応永在銘板碑に、網走板碑と同じく中央に花瓶一個を配し、その左右に紀年銘を割書きするもののあることを示され、網走板碑の紀年銘を「応永廿四」年と見て間違いないとした。清野謙次「北海道東北部紀行——網走方面の探究」(『民族』三ノ三)、久保常晴「北海道北見国網走発見の板碑についての私見」(『銅鐸』一、昭和七年一月)。
- (4) 前掲清野博士論文。この論文は後に『日本石器時代人研究』(岡書院、昭和三年)に所収。
- (5) クロマトマナイの地名は『竹四郎廻浦日記』下(弘化三年、一八四六年)にも見える。
- (6) 網走市教育委員会編『網走百話』(網走叢書一、昭和六十三年)三六頁。尚、清野博士はマルマトマナイに注釈して「和人の女の死んで居た小沼沢地」と記し、『網走市史』上巻はマルマトマナイをクルマトマナイに訂正したが語義については清野説をそのまま踏襲している。ところが、前述の松浦武四郎『蝦夷日誌』には「名義和女昔し居たる沢といへり」とあり、最新の前掲『網走百話』では「和人の女が住んでいたところ」とする説が有力としている。

- (7) 前掲清野博士論文。
- (8) 榎本守恵・君 尹彦著『北海道の歴史』(山川出版、一九六九年) 五七頁。
- (9) 同書上巻三〇六頁。
- (10) 「北海道応永板碑は関東型である」(『月刊考古学ジャーナル』89、昭和四十八年)。この論文は後に『続仏教考古学研究』(ニューサイエンス社、昭和五十二年)に所収。
- (11) 「北海道応永板碑考」(『月刊考古学ジャーナル』86、昭和四十八年)。
- (12) 播磨定男編著『中国地方の板碑』(山陽新聞社、昭和六十二年) 四二頁。
- (13) 徳富萬熊「備前の板碑に就いて」(『考古学雑誌』第四卷第四号、大正二年)、逸見敏刀「報恩寺所在の板碑に就いて」(『吉備考古』第五号、昭和五年)。
- (14) 播磨定男「岡山県真備町の青石塔婆」(『中国新聞』昭和五十七年九月二日付)、同「岡山県の板碑」(『徳山大学総合経済研究所紀要』第五号、昭和五十八年三月)。
- (15) 播磨定男「岡山県真備町の青石板碑——X線回折による石質分析と系統の問題——」(『徳山大学論叢』第三十三号、平成二年)、同「板碑造立の風潮」(『季刊考古学』第三十九号、平成四年四月)。
- (16) 白山氏も前掲論文で北海道に緑色片岩の産することを述べているが、網走板碑の石質に関しては本文でも紹介した如く輝石安山岩としている。
- (17) 戸井町郷土館にある二基の板碑は銘は磨滅しているが、その形態からして室町時代前期頃の造立と考えられる。双方とも地元産石の安山岩製で、しかも頭部に横二条の線刻を有していることから、日本海側の山形県酒田市、あるいは石川県能登半島との関連性が指摘されている。(久保 千々と両氏の「前掲論文」)

〈付記〉

昨年九月網走市での現地調査では、板碑の手拓から発掘地の現地案内に至るまで網走市立郷土博物館の御協力を賜わった。館長の本間義勝氏をはじめ和田英昭、米村 衛両学芸員の御厚意に心からお礼を申し述べたい。また、今年三月には亀田郡戸井町を訪ね社会教育課の古屋敷則雄氏、松沢ゆかりさんの御協力をいただいた。共に記して感謝の意を表したい。